

鶴島久男先生を偲ぶ

花葉会の創立時から幹事だった鶴島久男先生は、昭和23年に千葉高等園芸専門学校を卒業され、東京都立農芸高校園芸科教師となりました。先生と松戸の花専攻生時代で親しかった魚躬昭一氏が農芸高校卒であった縁で、赴任されたのは21歳の時でした。当時戦後の荒廃した環境で食糧不足の時代に予算もない中、花の園芸教育に取り組まれたのです。担任されたクラスの生徒だった私は16歳でしたが、在学中からお世話になりその後もずっと先生は私の人生の師でありました。元旦から大晦日まで農場で頑張っておられたお姿は今でも目に浮かびます。園芸当番の生徒は始業前にフレームの菰をはずし、放課後は栽培管理をしていました。それらの作業で夜遅くなったとき、先生は近くの蕎麦屋に生徒を連れていくのが常でした。少ない給料の中からのポケットマネーだったと思います。まさに若き熱血教師でした。いまでも印象に残っている先生の言葉があります。

「私の花の授業の内容は穂坂八郎先生に負けない…」

今にして思うと経験の浅い若い先生がしっかり教材研究をしていたのでしょう。

「仕事に全力をかけているから俺は結婚しない…」

しかしこのセリフは数年後に変わります。近くの本屋で見かけた娘さんにひと目惚れし猛烈にアタックして、賦子夫人を得ることになります。

「今の俺は君の考えている鶴島とはちがうよ…」

これは20年前の言葉です。私には教師のツルさんのイメージですが、その後の試験場、種苗会社、花の評論や著作などの活躍を考えると大きく発展して行ったことなのでしょう。

先生は高校教師（昭和23年～33年）、静岡県伊豆有用植物園（33年～36年）、東京都農業試験場（36年～

59年）、㈱ミヨシ専務取締役農場長を歴任し、その後、テクノホルテイ園芸専門学校客員教授の傍ら園芸評論や花の著作などで活躍されていました。しかし昨年秋から体調不良を気にされるようになり、12月に肺癌と診断され、普段丈夫だった先生には大変なショックであったと思います。無気力になり誰にも会いたくないとのお手紙を受け取りました。その後急速に病状が悪化し痛みの緩和治療も効果ないまま残念な結果となりました。3月10日夜、病院に伺ったときは大出血があって切迫した雰囲気でしたが、少し落ち着いたとのことでお会いすることができました。間近な死を意識しておられる先生から小さな声で有難うと言われ、思わず手を握り締め万感の思いで最後のお別れをしました。翌11日には東日本大震災があり直後の13日に不帰の客とられました。享年83歳でした。

先生は雑誌「農耕と園芸」にライフワークとして100回の予定で「花の文化」を連載中でしたが、残念ながら68回で中断となりました。どなたか御遺志を継いで完成できればと願っております。

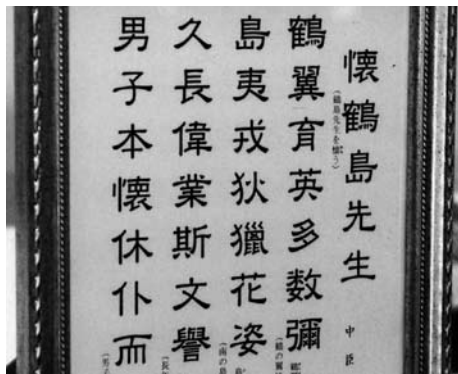
奥様からの気持ちを受けて「鶴島久男先生を偲ぶ会」を私たち教え子を中心になって5月29日に開催しました。農芸高校、ミヨシ、花葉会、試験場、出版界、生産者その他で270名の会になりました。教え子の多くは都内からでしたが、遠く南米アルゼンチンからは玉置昭雄氏が、さらに九州や東北からの参加もありました。会場にはドイツの元園芸学会会長からのメッセージや鶴島先生を懐かしむ漢詩が寄せられて、先生のスケールの大きな存在を改めて実感させられました。

慎んで先生の御冥福をお祈り申し上げます。

野田卯一郎 拝（昭和30年卒）



偲ぶ会会場に飾られた遺影



氏を懐かしむ漢詩